

一般紙記者として建築・都市の文化的価値を社会に知らしめた業績

松 葉 一 清 殿

松葉一清氏は、1976年京都大学工学部建築学科を卒業し、朝日新聞社に入社され、以来30余年にわたり記者及び編集委員として同紙上で建築評論を展開された方である。新聞人として活躍する傍ら、1979年の『やまぐち建築ノート』を皮切りに『近代主義を超えて』『日本のポスト・モダニズム』など、1980年代前半に早くも脱近代の嚆矢をなす評論集を上梓された。その後も1989年の『幻影の日本-昭和建築の軌跡』から2004年の『新建築ウォッチング2003-2004』に至るまで一連の近代・現代建築に関する評論を発表している。

本人の言を借りれば、1970年代後半はわが国における近現代建築評論閉塞の時代であったと言う。同氏はそこにおいて、近代主義の超克は過去への回帰でも近代からのスピントでもなく、近代主義建築自体に内在する普遍性の深化を検出しようとする作業の上のみ成立するものであることを看破していた。このことは同氏の新聞人らしい徹底した現場主義に表れており、その姿勢は後の一貫した都市のリアリズムの追及において揺るぐことなく続いたものである。

対象とした建築物全てを訪れ空間を体験した後に書かれる評論は、時として表層的な文化論に陥りがちな専門メディアのそれを圧倒する迫力を持つ。この現場主義に発する体験の蓄積は、1988年に出版された『帝都復興せり！』に結実する。これは1935年に出版された『建築の東京』という名の写真集に紹介された、当時の震災復興建築群のその後を訪ねた記録である。当時最新の474件の近代建築のうち、訪問不能な個人住宅等27件を除く447件「全て」の現地を訪れ、建築物が現存する場合はそれを、消滅している場合にはその場所のまさに体感温度から、当時の設計者たちの想いを紡ぎだしている。

この著作中に見られる建築評論家としての真骨頂は、設計者の属性に影響されることのない偏りなき評価である。同氏は当時の大建築家であろうが営繕組織の一技術者であろうが、その建築が後世にもたらしたものの意味をもって彼らの仕事を論じている。このゆるぎない公正な視点と平易な語り口を持つがゆえに、同氏は都市のリアルを作り出す現代建築を論じる場面においても、非専門家の読者からの共感を得られる数少ない評者であると言われる。1990年代以降の東京を覆う巨大開発群の評価にあたり、その筆は他の建築メディアでは到底切り込むことのできない、都市の現実が織り成す建築空間のリアルな価値を描き出すに至る。例えば当時、品川貨物駅の跡地に出現した長大な空中歩廊を歩いて、名も無き設計者の生み出した空間の格調高さを賞賛し、外国人建築家の名を免罪符に借用した巨大建築の「デザイン・アーキテクト」ブームを批判する。同氏は言う。都市のリアルを直視せよ、建築家の働き場所は、そこにある、と。

同氏は2008年に活動の本拠を武蔵野美術大学に移し、造形文化・美学美術史の教授として奉職された。その後も一貫する同氏の姿勢から読み取れるものは、都市には建築によってのみ創造できる価値があり、それを社会に定着することの文明史的な重要性の認識である。これは同氏の薫陶を受ける学生のみならず、創造を志す全ての建築人に共有されるべきものであり、さらに言えばそれは建築界のみならず社会全体を覆う閉塞感を打ち破る原動力となりうるものである。職業人としての半生を、建築の実像を社会に刻印することに当てられた同氏の業績はまさに日本建築学会文化賞にふさわしいものである。

よって、ここに日本建築学会文化賞を贈るものである。